

第15回福島浜通り地域の国際教育研究拠点に関する有識者会議議事要旨

日時：令和2年6月8日（月） 14：30～15：20

場所：中央合同庁舎4号館4階 共用第1特別会議室

出席委員：

坂根座長、上山委員、神田委員、斎藤委員、生源寺委員、関谷委員、中岩委員、永田委員、山崎委員、山名委員

議事要旨：

1. 議事

(1) 最終とりまとめ（案）について

事務局より、資料1に基づき説明があった。

この説明に関し、以下のような意見があった。

（坂根座長）この資料1「最終とりまとめ（案）」を本会議の最終とりまとめとさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

(2) その他

委員から、以下のような発言があった。

（委員）私も幾つかお願いした点があったのですが、いずれも適切に対処されていると思います。

福島大学は、全学的、具体的な検討に着手したという状況です。

もう一方、私は農学分野でありますけれども、実は、復興知事業を中心に、これまで全国から浜通りに対して色々な形で関与されている研究者、こういう方々を復興農学会という形で一つの流れにしようではないかと。これまではそれぞれ独立に色々なことが行われているのですが、それをつなぐようなことを考えて復興農学会を設立します。恐らく今月中には設立の大会が行われると思います。ただ、これは通常の学協会とは違って、農業経営者あるいは自治体の関係者等にも参加していただくような、ある意味では非常に実践性の高い学会になるかと思っています。

あと、イノベーションについていろいろな観点からの指摘があって、今後本当に楽しみなのですが、同時に、これが農村あるいは農山漁村のコミュニティーにどういう影響を与えていくかということ、つまり、イノベーションの社会的な効果あるいは地域的な効果、こういったところをしっかりと見極めてまいりたいと思っています。

(委員) 前回の発言の要旨もきちんと反映をしていただきまして、また、出島構想等についての正確な記述も入れていただきまして、どうもありがとうございます。

この最終案に関して、私は、改めて御意見を申し上げることはもうありませんけれども、恐らく今後は、これの実現に向けて進んでいくというプロセスに入るといいますので、この点は、前にもフラウンホーファーのようなというお言葉がありましたけれども、そのところの思いを、この新しいある種の出島のような研究所、そして、最終的に民間資金を大胆に取り入れながら、自ら立っていくような国際的な教育研究施設・設備となっていくことを期待しています。

(委員) この度、こうした形で日本として抱えている課題、そして、福島が抱えている幾つかの根本的な課題解決というゴールに向けて、色々な思いが集約されて、前例のない拠点構想がまとまったというふうに思っています。ゴールが見える形で共通化されたということで、今度はまた色々な立場の方々が活躍される中、研究者の立場として何らかのお手伝いできればと思っています。

(委員) これまでの意見やコメントが反映されており、良い報告書にまとめたのではないかと思っています。

一方、これはお願いですけれども、この報告書の最後に書かれている今後の工程ですが、2023年春に一部開所、2024年には本格開所だということで書かれていまして、あまり時間があるような、ないような感じですので、報告書に書いてあります年内の成案の取りまとめにどう持っていくのかということをよく見ていただきたいし、関与していただきたいと思えます。

それから、具体的に助走期間の、いわゆる先行プロジェクトという書き方をされていますが、福島イノベーション・コースト構想については、今、待ったなしで進んでいるわけですので、先行している、この報告書にもあります、例えば東日本大震災・原子力災害伝承館については、今年度開所する予定になっていますが、ここには実際には研究者が、常駐はしませんけれども関わることとなりますので、そういった方々の地位であるとか、それから、福島イノベーション・コースト構想が今行っております復興知の事業ですね。これをうまく組み合わせて、福島の地元はどう還元していくのかということも併せて考えていただくようお願いしたいと思います。

(委員) 今まで様々な研究者がこの福島県の原子力事故の抱えた問題に関わってきましたけれども、やはり拠点というか、今後数十年ずっとこの教訓を残しておく拠点というのがなかったのがネックだったと思います。原子力災害の教訓を継承し、復興の拠点となる研究所ができたというのは、廃炉や処理水、風評、様々な課題をまだ福島県は抱えておりますので、それを解決していくのに資するような研究拠点となり、また、浜通り、福島県の次世代や未来を創るのに資する研究拠点になれば良いなと思っています。

伝承館のほうにも常勤で3人、来年以降は研究員も多分いることになると思いますので、きちんと連携をし、国内や世界に向けた情報発信をしていければいいなと思っています。

(委員) 大変な困難を経験した浜通り、浜通りであるがゆえのチャレンジ精神、こういうものが見える化して発信することで、世界中が注目して、そして、世界中からリスペクトされる法人になることを願っています。

(委員) この最終とりまとめ(案)は、われわれの長い間の議論における意見がうまくまとまっていると思います。

これからこの最終とりまとめに従って実践される際は、ここに書き切れていない我々が認識

した難しい問題を実地で乗り越える必要があると思います。

また、具体的な構想が動くときには、参入を考える大学等名を念頭にしたいいろいろな議論も出ると思います。これらの課題を解決しながら、ぜひとも早々にこの構想を現実のものとする努力をお願いします。

(委員) 今回の取りまとめの過程におきまして、やはり皆さんが、地域の方、産業界を含めて、産官学を含めて同じ方向を向くことができたということが大きな意義があることだったと思っています。そして、その決意がこの報告書にも表れているかと思っています。

私自身は、ふたば未来学園さんをはじめ、教育の面で主に福島県さんと関わらせていただいております。そうした観点からも、国際教育研究拠点だけでなく、その周辺も含めて、小中からのシームレスな人材育成の強化にも取り組んでいただく点が非常に期待できると思います。

また、宇宙関係でも、今、宇宙でも他の産業界と連携をしようと、特に農林水産業、防災・減災、また、極限のロボットという形で親和性が高い分野が多いと思っています。実証から実装していくことが大切という観点で、宇宙の分野でも取り組んでおりますので、ぜひ連携させていただければと思います。

(委員) 3つ申し上げますが、まず、この拠点の構想は、究極の地方創生という言葉にも代表されるのですが、福島においてカバレッジが非常に広いものになったと思っています。今までは、福島イノベーション・コースト構想の一コマとしてこういう拠点の構想が考えられてきたのですが、今やイノベーションを超えるなりわい創出や生活インフラ、未来の地域を担う人づくり、あるいは、もしかしたら文化・スポーツ振興、あらゆるところにこの拠点がかぶってくるような気がします。そういう意味で、この拠点構想というのは福島の復興政策の中でかなり上位の大きなものに位置づけて、政府に全力で取り組んでいただきたいという思いを持っています。

2つ目です。この構想は、究極の地方創生ということを言っていますが、福島というのはまだまだ非常に大きなハンディキャップを負っているわけです。他の日本の地域と地方創生という意味で競争していくにはまだまだハンディがあり、そういうところにきっちりと継続的な手厚い措置を行いながら、ここにこの拠点をつくっていくという姿勢が極めて大事です。そういう意味で、産業界が手放しで入ってくるというにはまだハンディが非常に大きい。ということは、やはりアカデミー、学、大学に強いインセンティブを持って入っていただく牽引力というのが非常に重要でして、そういう意味では、まずは国の力、それから国の継続的な支援というのが必要になると思いますので、そこをよろしくお願いします。

3つ目ですが、この報告書が出る前にコロナウイルスの問題が非常に大きくなりました。このコロナウイルスの問題は、日本の社会対応あるいは経済的な仕組み、それからサプライチェーン、こういったものを大きく変えていく可能性があるというのをみんなウォッチしているところです。この拠点構想は、これから日本社会が変わっていくときに、この拠点がしっかりと福島の知の拠点として、そういった社会の変容にきちんと沿っていける拠点としても機能していく必要があるかと思っています。

そういう意味で、この拠点を社会の変容にきちんと追従でき、福島がレジリエンスを持った県としてこれからも続いていくような強い力を持った拠点になっていくということを、強くお願いしたいと思います。

(坂根座長) 今回の作業は大きく分けて2つの視点があったと思います。1つは、5年前から始

まった福島イノベーション・コースト構想をベースにする。当然のことですけれども、ここで取り組んでおられるテーマは、今回レビューしてみても、テーマそのものはもうほとんどカバーをされてきている。ただ、それぞれの研究テーマごとの生い立ちが、最初に全体構想があってスタートしたものではありませんから、横のつながりは、今から考えてみるとこういうつながりが要るのではないかということと、それから、当初からの教育、大学あるいは大学院みたいなものを想定していたわけでもないし、地元の雇用というのも必ずしも雇用創出を大きな目標にしてというところからスタートするよりも、まずは研究機能とかテスト機能、こういったところからスタートしようとして来ているから当然なのですけれども、やはり教育とのつながり、要は産業創出みたいなのが課題だったのだらうと思います。

ですから、私も、皆さんの御意見をいただきながら濃密に議論をして、報告書としてはかなりまとまっているなと思うのですが、皆さん御指摘のように、この後、この具体化をするのに、どのテーマが本当に良い人材を集めてこられて、雇用も比較的皆さんに早くお見せできるような成果が出るテーマになるか。あるいは、このテーマならば国際的人材を集められるという、具体的に考える部分がキーだと思いますので、これから浜通りは長いチャレンジになりますけれども、基本的な考え方はこれでかなり幅広くまとまったなと思いますが、これからは本当に大変だなと思っています。

(田中大臣、菅家副大臣入室)

(内堀知事) 福島の復興に向けて熱心に、真剣に御議論いただき、本当にありがとうございます。今回の最終報告書としてのとりまとめに対し、県を代表して感謝を申し上げます。

また、田中復興大臣をはじめ、政府の皆さんが一丸となって、国家プロジェクトとして積極的に検討を進めていただいていることにも御礼を申し上げます。

福島イノベーション・コースト構想に関しましては、3月に福島ロボットテストフィールドが全面開所するなど、各拠点の整備が着実に進んでいます。今後は、こうした施設やその研究成果を有機的に連携させて、地域産業に具体的な効果を発現させるよう取り組んでいくことが重要です。本構想をはじめ、福島の復興には息の長い取組が必要です。この長い戦いに挑んでいくため、福島を全国に先駆けて様々なチャレンジができる地域とし、そこから生まれるイノベーションで、浜通り地域等の課題を解決していくことによって、この地域を課題先進地域から、夢が叶えられる地域へと変えていきたいと思っています。

この国際教育研究拠点の設置は、構想の取組を前に進め、浜通り地域の復興・再生を達成するための大きな推進力となります。地方創生のモデルとして国内外に誇る拠点になるものと期待をしています。県といたしましても、これまでの有識者会議における議論を踏まえながら、国、市町村、関係機関と力を合わせながら、周辺環境の整備や産業集積などに積極的に取り組んでまいります。

委員の皆様、これからも引き続きの御理解と御支援をよろしくお願いいたします。

(坂根座長) この最終とりまとめは、国際教育研究拠点の目的、機能、研究分野、組織形態、産学官連携、人材育成の仕組み、必要な生活環境・まちづくり、今後の工程といった非常に幅広い具体的な提言をまとめています。

内容を大きく分けると2つの視点があります。1つは、もう5年前から始まっております

福島イノベーション・コースト構想、これが具体的に色々な形で進行中でして、これを改めて我々で振り返ってみた。当然のことながら、取り組んでいるテーマそのものは、今回振り返ってみても本当に必要なテーマを取り上げてこられたと思います。

それから、もう一つの視点が地方創生。これは私の思いでもあったわけですが、ほかの地域は色々な制約条件があり、既に存在している大学、産業界があるわけで、なかなかゼロからスタートというようなことにならないのですけれども、福島の場合は、不幸にして白紙の状態からある程度考えられるということで、産官学の連携をどうするか、あるいは規制に対して、もしレギュレーションフリーならばこういうことができるのではないかというような福島イノベーション・コースト構想と地方創生の代表モデルという2つの大きな視点でまとめられると思います。

まず、福島イノベーション・コースト構想ですが、廃炉、ロボット、エネルギー、農林水産等を重点分野と位置づけて、研究開発に係る施設の整備やプロジェクトの具体化、産業集積に向けた取組が進められてきています。一方で、1つずつ追加されていった形の研究テーマといえますか施設ですから、全体のつながりをもう一度振り返ってみる必要があるということと、それから、人材育成につながる部分というのはなかなか中長期的にわたるテーマで、これを改めて我々がどういうふうにか考えるかということも議論してきたと思います。

今後、この福島イノベーション・コースト構想をさらに加速して、福島浜通り地域の復興・創生を実現していくためには、魅力ある新産業をどうやって創出するか。そのためにも、様々な分野の研究者や技術者を育成することが極めて大事だと。そのためには、この福島にいい人材を集めるという、待遇を含めた、あるいは生活環境を含めた配慮が必要になる。その全体を取りまとめる司令塔となる中核拠点が今回の研究機関だというふうに思います。

また、一方、地方創生に関わる部分ですけれども、我が国は人口減少、特に若者の減少、女性活用もそうですが、こういった幾つもの社会課題があります。これに福島でどの部分から取り組んでいけば成果が出るかということで、産官学の連携をまずしっかりしようと。

それから、先ほど申し上げましたように、福島浜通り地域ならではのレギュレーションフリーを活用したら成果が出る可能性があるのではないのかと。あるいはイノベーションのためのベンチャーのスタート、若者の魅力を集めるためのベンチャー的なものが要るのではないのかという視点が入っています。

いずれにしても、約1年間、15回にわたって、各分野で見識の高い皆様方に熱心に議論を重ねていただいて、取りまとめができたと思っています。今後は田中復興大臣のリーダーシップの下で、先例にとらわれない大胆な発想の下で政府一丸となって取り組んで、原子力災害に見舞われた福島浜通り地域ならではの特色を生かした新たな価値を創出する国際教育研究拠点の一日でも早い具体的な整備を求めていきたいと思っています。

約1年間、皆さんの御協力を得て、まずは第1段階として報告書が取りまとめられたことに対して御礼を申し上げます。

坂根座長から田中大臣に、最終とりまとめが手交された。

田中大臣から、次の挨拶があった。

<田中大臣> ただいま、坂根座長から最終とりまとめをいただきました。委員の皆様には、開催回数は合計15回、約1年近くにおよび大変熱心な御議論をいただきまして、坂根座長のリーダーシップの下で素晴らしい御提言をまとめていただきました。心より感謝御礼を申し上げる次第でございます。

その上で、3点お話を申し上げます。

1点目でございます。福島イノベーション・コースト構想をさらに加速し、福島浜通り地域の復興・創生を実現していくためには、魅力ある新産業を創出すること、そして、様々な分野の研究者や技術者を育成することが重要でございます。本拠点はそのための司令塔となる中核的な拠点としていきたいと思っております。

2点目でございます。世界に誇る素晴らしい拠点にすると同時に、地元貢献する拠点にもしていく必要がございます。研究だけに留まらず、実用化、新産業創出に結びつく拠点とすることにより、浜通り地域の定住人口の拡大を目指すことが重要であります。

また、大学・大学院の設置を望む地元の方々の声を踏まえて、将来的に大学等の設置に結びつくように、多数の大学と連携をして、人材育成を行う拠点としていきたいと考えております。

3点目でございます。地元自治体との連携であります。原子力災害に見舞われた福島の復興は、国の社会的な責任でございます。一方で、魅力ある立地、研究環境の提供などについては、福島県の内堀知事をはじめ、地元自治体の役割が非常に重要でございます。しっかりと連携をしていきたいと考えております。

今後は、この最終とりまとめを十分に踏まえ、関係省庁等としっかりと連携し、関係自治体等の意見をお伺いしつつ、本年内を目途に、政府として成案を得てまいります。「復興・創生期間」後の浜通り地域の復興の中核拠点となるものでございますので、委員各位の想いをしっかりと受け止めて、担当大臣として覚悟をもって取り組んでまいります。どうぞこれからもよろしく願いいたします。本当にありがとうございました。

坂根座長、本当にありがとうございました。

(坂根座長) 最後になりますが、委員の皆様におかれましては、約1年間、プレゼンテーションをはじめ、最終とりまとめに向けて多大な御尽力をいただきました。改めて御礼を申し上げます。

政府におかれましては、今後、この最終とりまとめの内容を踏まえて、復興庁を中心に政府一丸となって取り組んでいただき、国際教育拠点が一日でも早く具体的に整備されることをお願い申し上げます。

最後に、田中大臣、改めて一言何かございますか。

(田中大臣) 我々も責任をしっかりと果たしてまいりたいと思います。

2. 閉会